

覚王山インタビュープロジェクトの変遷

土居美有紀

要 旨

「覚王山インタビュープロジェクト」は、2004年秋学期から南山大学外国人留学生別科でほぼ毎学期実施されてきた。数回に及ぶ日本語プログラムのレベルの見直しにより、このプロジェクトが考案された当初に対象とされていたレベルとは異なる日本語レベルの学習者を主な対象として実施されてきたが、これまで受け持ってきた教員の工夫により学習者のレベルに合わせたプロジェクトに改良されつつ現在まで続いている。執筆者が担当した2018年秋学期から2023年春学期までは、2回に及ぶ履修対象者の日本語レベルの変更、新型コロナウイルス感染拡大によるオンライン化など、様々な要因により教材やコースの見直しを特に強いられた年であった。2004年の実施から変わらず言えることは、学習者はこのプロジェクトを通して日本語力の上達を実感しており、学習者が達成感を得られる活動になっている点である。

キーワード：短期留学生、日本語初級後半レベル、インタビュー、プロジェクトワーク、オンライン

1. はじめに

「覚王山インタビュープロジェクト（以後覚王山PJ）」¹⁾は、覚王山商店街の店で留学生がインタビューを行うプロジェクト活動で、2004年秋学期からほぼ毎学期本学の外国人留学生別科（以後別科）で実施されてきた。2004年から2012年春学期までは、主軸である日本語コースの一環として行われてきたが、2012年秋学期に別科の日本語コースレベルが見直されたことに伴い、日本語コースとは別に選択科目として開講されている日本語セミナークラス（以後セミナー）として独立して行われるようになった。これまで様々な教員によって担当され、執筆者も2012年春学期に主軸の日本語コースの一課題として行われた際に一部関わり、その後、2018年秋学期から2023年春学期まではセミナー担当を務めた。執筆者が担当した5年間には、さらに2回ほど履修対象者の日本語レベルの変更が行われ、加えて新型コロナウイルス感染拡大により留学生の渡日が制限されるという事態となり、特に変化に対応することが求められた期間であった。本稿では、まず覚王山

PJがセミナーとなるまでの変遷を記し、次に2018年秋学期から5年間の活動をまとめ、履修者レベルの変更やコロナの影響により、どのように学習者に合わせてコースを見直してきたかを述べ、最後に2023年春学期授業アンケートからの履修者の声や店側の感想を報告する。

2. 覚王山PJの変遷

2.1. 先行研究

(1) 活動のはじまり

覚王山PJが始まった経緯とその活動内容については津田（2010）に報告されている。覚王山PJは2004年、主軸である日本語コースIJ400で行われる様々な活動の1つとして始まった。このコースは日本語教科書『中級の日本語（以後IJ）』を主教材とした中級前半レベル²⁾の集中日本語クラスであった。津田は、このレベルの学習者は初級レベルの文法を習得し、日本人とコミュニケーションができるようになり日本語力の上達を実感し、さらに上のレベルを目指して学習意欲が高まっているものの、彼らが接することができる日本人は学内やホストファミリーなど身近な日本人に限られている点を指摘し、覚王山PJの意義を述べている。このPJで店員にインタビューすることは、初めて会う目上の人と話すために丁寧な日本語（授業で学んだ敬語など）を使用し、マナーに気を付けて礼儀正しい態度で接しなければいけないという自然な状況を作り出すと同時に、教室外での異文化理解や国際交流の機会を学習者に与えてくれる。また、インタビューの結果を口頭で発表し、報告書をまとめることは、聞く、話す、書くなど多技能に渡る日本語学習活動であり、総合的な日本語力向上が期待できる。一方、インタビューが覚王山で行われる理由については、名古屋市中心部の繁華街ほど賑やかではなく適度に静かで、留学生の受け入れに協力的である点が述べられている。

(2) 活動の概要

プロジェクトはインタビュー、口頭発表、報告書の3つの活動から成っている。主な活動の流れを表1に示す。インタビューは、陶器店、紅茶店、畳店、和菓子店、仏具店、炭の専門店など26店舗³⁾ほどの候補から学習者が興味がある店を選び行われた。発表時間は一人約3分で、二人なら7分、三人グループなら10分程度で、見て分かったことや聞いて分かったこと（インタビューの結果）、インタビューして感じたこと、店の宣伝の3つの内容を含むものであった。発表後は原稿を元に報告書が作成され、最後に小冊子にまとめられ学習者本人やインタビュー先に配布された。

覚王山PJは2、3名のグループで行われた。IJ400には毎学期約40名もの学習者が在籍し

ており、インタビューが行える店が限られていたという物理的要因もあるが、グループワークである理由について津田は、学習者が協力することにより補い合い、学び合うことができ、一人よりもよい結果が期待できることを挙げている。一人がインタビューの答えを聞き逃しても他のメンバーが聞き取れる可能性があるなど日本語面での助け合いやコンピュータスキルが高い学習者が中心となって発表スライドを準備する⁴⁾など、各学習者が得意な能力を生かし、互いに助け合い作業を進めることができるからだ。一方で、グループプロジェクトの問題点について、一緒に組むグループメンバーの日本語力などにより、グループ成果物の完成度に差が生まれ評価（成績）が悪くなった場合や、課題に取り組む過程でメンバー間に摩擦が生じた場合、学習者がプロジェクトの活動全体に不満を持つことがある点を挙げている。また、グループワークを好まない学習者や様々な要因でグループワークに不向きな学習者がクラスにいた場合、教員がグループ分けの際に配慮したり、一人での実施を認めたりするという特別措置を行ったことも報告されている。

表1 主な活動の流れ

日本語コース内の授業時間の一部を使って実施（2012年春学期まで）	
1	説明、グループ分け、インタビューする店を決める →店の外観の写真と店のリスト（店名と「日本のお菓子」など取り扱っている商品が簡単に書かれた表）を見ながら、店を決める。
2	インタビューの質問を考える →歴史、商品、店主・店員、客、コンセプトなどから2～3のテーマを選びテーマに沿って質問を考える。
3	学外授業の説明、インタビューの準備
4	インタビューの練習1（表現の導入と教室内での練習）
5	インタビューの練習2 →学外から教員や大学生ではない一般の日本人を招き、実際のインタビューに近い状況で練習を行う。ボランティアの日本人は店員を演じ、留学生はインタビューの質問をする。インタビューの練習後、ボランティアから難解な質問や失礼な態度がなかったかなどアドバイスやフィードバックをもらう。
6	学外授業（覚王山でインタビュー実施）
7	口頭発表の原稿を書く →見て分かったことや聞いて分かったこと、感じたこと、店の宣伝を入れて書く。
8	口頭発表の説明
9	口頭発表の準備と練習
10	口頭発表のリハーサル
11	口頭発表
12	報告書を書く →口頭発表の原稿を元に、「です・ます体」の文体を「だ体」に変更する。題をつけ、3つの章（どんな店か、インタビューの内容、店のセールスポイント）を作って小見出しをつけ、写真を入れる。
13	礼状を書く

2.2. 独立したセミナークラスへ (2012年秋～2018年春)

(1) 履修者レベルについて

2012年、別科の日本語コースレベルが見直され、各日本語コースが取り扱う教科書の範囲が変更された。それまでのIJ400は『IJ』を主教材とした、初級文法を終了した学習者のための中級前半クラスであったが、それに代わるコースとして作成されたNIJ400は初級日本語教科書『げんきⅡ』の16課から『IJ』の4課までを扱うクラスとなった(2013年秋学期からは『げんき』15課から『IJ』2課までを扱うことに変更され、2018年春学期までその体制が続いた)。またこれまで日本語コース内に組み込まれていた覚王山PJは、このNIJ400の学習者を対象とした選択制の日本語セミナークラス(週1回開講)として独立し、「NIJ430プロジェクトワーク」となった。ここで注目すべき点は、この授業が履修できたのは日本語クラスNIJ400の学習者で、このクラスは下から2つ目⁵⁾の日本語レベルのクラスであった点である。覚王山PJが考案されたIJ400のクラスは下から3つ目のレベルで、初級文法をある程度使いこなすことができる中級学習者のためのクラスであり、覚王山PJは主軸の日本語コースで学期末に向けて行われた活動であったため、プロジェクトを実施した頃の多くの学習者の日本語レベルは中級後半に近づいていたと予想できる。しかし、プロジェクトが独立し、NIJ400という初級後半レベルの学習者を対象とした選択授業に設定されたことにより、ある程度日本語力に自信がある中級の学習者が、日本の生活に慣れた学期半ばに教室外での実力試しとして行っていたプロジェクトから、日本人と日本語だけでやり取りを行うことにまだ不安がある初級後半の学習者が、日本の生活に不慣れな学期開始直後からインタビュー準備に取り掛かるという少し難易度の高いクラスになった。

(2) 活動の変更点

プロジェクトを行う学習者の日本語レベルが以前より下がるという懸念はあったものの、当時のNIJ400は『げんきⅡ』の16課から始まり『IJ』の4課までをカバーするクラスであったため、初級文法が定着しておらず本来入るべき中級クラスに入れずこのクラスに入った学習者も多かった。そのような中級レベルに近い学習者がこのセミナーの履修対象として見込まれ、本学でゼロ初級から日本語の勉強を始め半年後にNIJ400に入る継続生を除き、日本語学習歴が短い初級学習者がこのセミナーを取ることは考えにくかった。従って、活動の流れや教材は津田が中級前半の学習者を対象に行っていた時のものに大幅な変更を加えることなく引き継がれた。他方、以前は主軸の日本語コースの限られた授業時間内に行われていたプロジェクトがセミナーとして独立したことにより、それまで宿題としていた課題も授業で時間を取り丁寧に指導できるようになり、追加の活動や練習も用意された。例えば、以前は「店の名前と商品が書いてある簡単なリスト」と店の外観の写真だ

けを見て、学習者たちはインタビューに行く店を決めていたが、店を決める前に、各店について紹介した短い読み物を読み情報を取るという活動が追加された。またインタビューの質問づくりに関しては、提示された質問をどの順番で聞くとよいかを考える練習の他、質問の答えからどのような質問をしたか（主に疑問詞）を考える練習も追加された。これは履修者が中級から初級の学習者になったことが大きいと思われる。中級の学習者は聞きたいことを自分で日本語にすることができるが、初級の場合はゼロから日本語で質問を考えることが難しい学習者もいる。これらの質問に関する練習問題は、学習者が自分でインタビューの質問を考える際のヒントになる。

その他に変更されたものには、学外の一般の日本人を呼んでのインタビュー練習がある。これは前任の津田の人脈によるところが大きかったこともあり、学内の日本人学生ボランティアとの練習に変更された。また、それまでは1つのレベル全員（約40名）がインタビューを行っていたので、商店街の多くの店の協力が必要であったが、選択制のセミナーになり履修者が最大15名と設定されたため、インタビュー先も6～8店舗に厳選された。これには、多忙の中無理を言ってお願いしていた店に何うことを控えた他、インタビュー実施が水曜日の午後（他の授業が開講されていない時間帯）に固定され、店の定休日などと重なり自然と数が絞られたという経緯もある。

3. 2018年秋学期～2023年春学期の実践

3.1. 2018年秋～2019年秋の実践

(1) 日本語レベル見直しに伴う教材の修正

執筆者が引き継いだ2018年秋学期は、再び日本語コースの見直しが行われた時期であった。2013年秋学期から『げんきⅡ』15課から『IJ』4課までカバーしていたNIJ400は、JPNⅡとなり、『げんきⅡ』1冊のみを扱うコースとなった。覚王山PJはNIJ430からProject NⅡに改名され、JPNⅡの学習者が履修できるセミナーとなった（表2）。履修者の日本語レベル変更により、これまでプロジェクトの授業で使用されてきた教材に含まれる文法や漢字、語彙の多くがJPNⅡの学習者（げんきⅠを終了したばかりの学習者）にとって未習となったため、教材の大幅な見直しが必要となった。語の知識量（既知語率）が文章理解を促進する要因として機能するかを調査した研究によると、既知語率が高いほど内容理解が促進され、日本語学習者が文章を読んで8割以上理解するには96%程度以上の既知語率が必要であることが示唆されている（小森他2004）。このセミナーは、一般的な日本語の授業とは違い、課ごとの練習を通して文法や表現を学び言語知識を増やすことを目標としているわけではない。主軸の日本語コースで学んだことを使いプロジェクトを進めることを目指しているため、学習者が辞書を片手に課題の指示を解説する読解教材になっ

てはいけない。従って、以前の履修者の日本語レベルに合わせて作成された教材の難易度を下げる必要があった。具体的には、教材に『IJ』や『げんきⅡ』の後半で学ぶ文法項目が含まれていれば、学期の始めに使用する教材は、1つ下の日本語クラスで扱っている教科書『げんきⅠ』で学ぶ文法項目を使った言い回しに変更し、その後徐々に主軸である日本語クラス（JPNⅡ）の進度に合わせて『げんきⅡ』で学ぶ文法項目が出てくるように書き換えた。同様に、漢字や語彙もJPNⅡで導入される進度に合わせて未習漢字にはルビを付ける、未習語は既習語に言い換えるか、英訳を付けるなどし、文法項目、表現、単語、漢字など様々な視点から教材の見直しを行った。また、初級前半を終了したばかりの学習者の中には日本語で作文を書いた経験がほとんどない者もあり、発表原稿を書くことに苦労していた学習者もいた。そこで、モデル作文（発表原稿のモデル）の見直しも行った。これまで提供されていたモデル作文はインタビューの3つのテーマのうち1つ（店の歴史）のみであったので、他のテーマの例も加え全体像が分かるようにモデル作文を長くした。作文の内容も初級の学習者に分かりやすいよう、「商品はだれがどうやって作っているか」や「一番人気がある商品／売れる商品は何か」「どうやって商品を考えるか」など学習者が用意した質問と似た質問を使ったシンプルなものに差し替えた。さらに、1つのテーマについて①インタビューで分かったことを書いた後に、②インタビューをして思ったことや考えたことを書くという2段構成になっていることが捉えられず（事実と書き手の考えが区別できない）、インタビューの質問の答えを羅列するだけの学習者がいたので、①のインタビューで分かったことを書く時、どのような質問をして、その答えをどのように作文にまとめたのかの解説や、②そのインタビュー結果を聞いてどのように感じたのかが書かれている部分はどこかが分かるよう、作文の構成を示す解説をモデル作文に付け加えた。

表2 対象者の日本語レベル

年、学期	日本語クラス	日本語クラスの教科書	セミナークラス
2004年秋～2012年春	IJ400	中級の日本語（IJ）	
2012年秋～2013年春	NIJ400	げんきⅡ L16-L23、中級の日本語（IJ） L1-L4	セミナークラスNIJ430として独立
2013年秋～2018年春	NIJ400	げんきⅡ L15-L23、中級の日本語（IJ） L1-L2	NIJ430
2018年秋～2021年春	JPNⅡ	げんきⅡ	Project NⅡ
2021年秋	IJⅢ	カルテットⅠ	Pre-intermediate Projects in Japanese
	IJⅡ	げんきⅡ	
2022年春～2023秋	IJⅢ	カルテットⅠ	Pre-intermediate Projects in Japanese
	IJⅡ	げんきⅡ	
	Fundamental JapaneseⅣ ⁶⁾	げんきⅡ L19-L23	

(2) 店について

2017年春学期にはインタビュー先は6店舗になっていたが、この学期から時間が取れなくなった店もあり、さらに4店舗⁷⁾に減少した。インタビュー先の候補が多く履修者が少ない場合、学期によってインタビューを依頼する店としない店が出てしまう。ここ数年の履修者は10名弱であったので、4店舗は毎学期継続して依頼するのに程よい規模であった。

(3) グループ活動について

インタビューはこれまでと同様2～3名のグループで1つの店に行くようにした。4つの店から学習者に興味がある店を選ばせ、グループ分けを行った。履修者が少ない学期は、1つの店を選んだ学習者が一人だけということもあった。その場合は、一人でプロジェクトを行う負担の大きさを学習者に伝え、学習者の日本語運用能力も考慮して許可した。また、単独でインタビューを行うことが難しいと思われる日本語運用能力の履修者が多い学期は、グループ分けで一人になることを避けるためインタビュー先をその場で決定せず、まず学習者に第二希望まで店を選ばせ、教員がグループ分けを行い、次の授業でグループと店を発表した。

発表もグループで行う場合と単独で行う場合では、負担が異なる。グループで行う場合は、インタビューの3つのテーマ（歴史、商品、客についてなど）をメンバーで分担して発表することになるが、単独で行う場合は、3つ全てのテーマについて一人で発表する必要がある。全てのテーマについて原稿を覚えて発表することは初級の学習者には難易度が高く、グループで発表する学習者との負担の差が大きい。そこで単独で発表する場合は、学習者が一番発表したいテーマだけは覚えて発表させ、残りの2つのテーマについては原稿をスムーズに読みながら発表できればよいことにして、評価を行った。

(4) 追加の活動について

執筆者が担当する他のセミナークラスでは、サービスの受け手と与え手の双方に利益があるサービスラーニング（Furco1996）に基づいた授業を行っていることに着想を得て、インタビューをした店に何か学習者が還元できることはないかと考え、学習者が自分の国の言葉で店を紹介したチラシ（日本語訳付き）を作成することにした（資料1）。毎学期様々な国の履修者がいるため、学習者がチラシを作成し、そのチラシを見て外国からの客が増えれば店の役に立てるのではないかと考えた。実際に、後の学期（2023春）の発表で「欧米からのお客さんが少ないのは残念だ。英語でオンラインの広告を使ったら（*作ったら）、もっとアメリカやヨーロッパ人やインドからのお客さんも来るかもしれないと思った。私は日本に来た時、紅茶の店を探していたが見つけれなかった。」と述べた学習者もいた。このことから、実際学習者も外国語で店を宣伝するものがあればよいと感じており、チラ

シ作りはそれを彼ら自身で実現する活動になっていたことが示唆された（発表を行った時点では学習者にチラシを自ら作成する課題があることを伝えていなかった）。チラシは発表後、期末課題の一部として報告書と共に作成させ、後日お礼の手紙や報告書と共に店に送付した。

(5) 評価について

授業参加、課題の提出、発表（発表原稿と口頭発表）、レポート（報告書と店のチラシ）で評価した。発表をグループで行う場合は、発表原稿を個人点（日本語面と内容）とグループ点（全体の構成）に分けて評価した。発表は、内容（説明が十分か）、正確さ・発音・流暢さ、印象（アイコンタクト、態度、ジェスチャー、チームワークなど）を評価対象とした。

3.2. 2020年春学期～2021年春学期のオンラインによる実践

(1) 2020年春

2020年春学期は学期半ばの3月に新型コロナウイルス感染拡大を受け、留学生在が帰国させられた。店へのインタビューは学習者の帰国が決定される直前に行ったので、インタビューの結果をまとめて発表するところは学習者が帰国後オンラインで行った。感染拡大直後はまだ別科のオンライン授業が整備されておらず、帰国後世界中から履修している学習者の国と日本との時差もあり、Zoomでの同期型授業ではなくオンデマンドのオンライン授業で学期が継続された。そのため、Canvas（LMS）を使い発表原稿を提出させ、フィードバックと修正を行った後、発表ビデオを録画させた。発表ビデオは、パワーポイントをZoomで画面共有しながら、自分が話している顔の画面も入れた状態で録画させ、Canvasのディスカッションボードに投稿させた。自身の顔も一緒に録画させた理由は、できるだけ原稿を読まず覚えて発表させたかったということもあるが、コロナで離れ離れになったクラスメートの顔が見えたほうが励みになり、発表を見る時も集中力が途切れにくくなるのではないかと考えたからだ。投稿した発表ビデオはお互いに視聴し、コメントや質問を各投稿の「返信コメント」に書くよう指示した。発表ビデオからは学習者の個性が感じられ、YouTuberのようにアニメーションを駆使して見ごたえのある発表ビデオを作製した学習者もいた。

(2) 2020年秋

2020年秋学期は学習者が渡日できず完全オンライン留学となったが、前学期からの継続生で既に日本におり、帰国する必要がなかった学習者数名の履修が見込まれたため、開講されることになった。また、Zoomで日本の店と履修者の国を繋いでインタビューを行っ

たり、海外からの履修者の町にある日本人の店でインタビューを行ったりすることも可能ではないかと考え、渡日できない学習者も履修できるようにした。

履修者は日本にいる学習者3名と、アメリカからの学習者1名であった。この学期は別科の授業体制がオンライン留学向けに整備されつつあったので、Zoomを使った同期型とCanvasを使った非同期型のものを組み合わせて行った。Zoomで説明した後、各自個別に作業を進め期日までにCanvasに提出するという流れで対面時に近い形で授業が行えた。日本にいる学習者は感染症防止に配慮しつつ例年通り店に引率してインタビューを行ったが、アメリカからの学習者は、Zoomで日本の店にインタビューするより自国にある日本人の店にインタビューに行くことを選んだので、日本にいる学習者がインタビューを行う週に自分でインタビューに行くように指示した。発表は全員、Zoomでパワーポイントを画面共有しながら行った。

アメリカからの学習者は自国にある日本料理店の創設者にインタビューを行った。この店は現在ご子息に引き継がれ、SDGsをテーマにした店となりサステナブルな寿司やベジタリアンの寿司などを作っている。ベジタリアンの寿司とは「焼いたうどんで作ったイカのような味の寿司」で、サステナブルな寿司とは、「生態系のバランスを壊す外来種を使った寿司」だと発表で説明していた。コース終了後にこの授業についてのコメントの記入を求めたところ、夏休みに大学のファームインターンシップをしてこの日本料理店を知り、もっと知りたいと思いこの店をインタビュー先を選んだことが分かった。またこのプロジェクトについて、「自分で日本語を使って（近くにある）日本人のレストランについて習う経験がよかった」というコメントが得られた。日本の店と自分の国の店とどちらにインタビューするかを選ばせたがそれに関しては、自分の国に日本人がいるなら、Zoomで日本の店にインタビューするより、自分の国の店の人にインタビューするほうがよいと述べていた。その理由としては、自分で店を探して店員にアポを取るの「大切な経験」であること、また「ジャパントウンやペルーやブラジルの日系など他の国に日本人のおもしろい移民の歴史があるかもしれない」ということを挙げていた。

(3) 2021年春

2021年春学期もオンライン留学が継続され、履修者はアメリカと中国からの2名であった。2020年秋学期同様、Zoomで日本の店にインタビューするか自国の店にインタビューに行くかを選ばせたが、アメリカ人の学習者が住んでいる地域には日本人の店がなく、中国人の学習者は店とのインタビュー交渉がうまくいかず、どちらもZoomで日本の店にインタビューを行うことにした。2名とも和菓子に興味があったので、覚王山の和菓子店とZoomを繋いでインタビューを行った。教員が店にパソコンを持ち込み、学習者には教員が指定したZoomミーティングに参加してもらい、店の人と繋いだ。店内の様子は、教員

がスマホでZoomに参加し、その場で撮影した映像を共有して伝えた。発表は前学期に引き続きZoomで行ったが、この学期は日本人学生にゲストとして参加し、質問してもらった。コース終了後、無記名のアンケートを実施し学習者からコメントを得た（表3）。

表3 学習者の感想

Zoomのインタビューはどうだったか・プロジェクトでよかったこと
<ul style="list-style-type: none"> ・ It was very easy to communicate. The teacher was very nice and went to the store for us. But I wish I could see the store in person. ・ I liked learning about wagashi. The storekeeper was very nice and told us many things about wagashi.
大変だったこと
<ul style="list-style-type: none"> ・ Team projects and collaborating were a bit challenging.
どんな学生におすすめか
<ul style="list-style-type: none"> ・ I think all Japanese students should take the class. It helps students learn Japanese and Japanese culture.

渡日できなくてもZoomでのインタビューは可能で、日本語や日本文化（和菓子）について学べたことに満足感があったようだ。一方でオンラインでのチームプロジェクトは時差の問題もあったからか（アメリカと中国）大変であったようだ。

3.3. 2022年秋学期と2023年春学期の対面による実践⁹⁾

(1) 変更点

2022年秋学期と2023年春学期は対面授業が再開され、コロナ以前のようにインタビューも対面で行った。また2021年秋学期から、Intensive Japanese II (IJ II) の1つ上のレベルの日本語クラスであるIJ IIIの学習者も履修できるようになっていたが（表2）、2022年秋学期に初めてIJ IIとIJ IIIの2レベルの学習者が履修した。それに伴い、IJ II（旧名JPN II）の学習者用に修正した教材を再びIJ IIIの学習者のレベルにも合ったものに修正する必要が出てきた。そこで、発表のモデル作文にIJ IIIの学習者用に難易度を上げたものを追加した。IJ IIIの主教材である『カルテット I』の文法項目を取り入れたものにし、内容も考察を長くし深みを出した。

(2) 今後検討すべき課題

2022年秋学期の履修者は4名⁹⁾であった。4名全員が別々のインタビュー先を希望し、そのまま単独でインタビューを行うことを希望した。IJ IIIの学習者は単独でのインタビューに問題がない日本語レベルであったが、IJ IIの学習者も留学前に国で『げんき II』の内容を学習済みであり日本語のみで日本人とやり取りが可能なレベルであったので、単独でインタビューを行うことを認めた。IJ IIとIJ IIIの学習者の間には日本語力の差が見られたが、インタビュー前の準備など一部のグループワークを除き、個別に準備が進められ

たため、1つのクラスで2レベルの学習者が学ぶことはクラス運営上あまり大きな問題にはならなかった。

2023年春学期の履修者は6名¹⁰⁾であったが、学習者の希望が2つの店に集中したため、2つのグループに分かれてインタビューを行うことにした。IJ IIとIJ IIIの学習者混合のグループとIJ IIの学習者のみのグループに分かれ、日本語レベルによる進度差が目立った。授業時間内に課題が半分も終わらない学習者もいれば、ほぼ完成させてしまう学習者もいたが、余力のあるIJ IIIの学習者に追加の課題を与えるべきか、与えるならどの程度のものが適切かなど、検討すべき点が浮上した。

4. 2023年春学期のコメント

2018年秋学期から2023年春学期までの5年間の総括として、学習者や店側はこのプロジェクトについてどのように感じているのかコメントをまとめることにした。

4.1. 学習者のコメント

2023年春学期の授業評価と無記名によるウェブアンケートから得られた学習者の声を紹介する。授業評価コメントは6名中5名、ウェブアンケートは1名から回答を得た。

表4 学習者の感想（授業評価のコメントとアンケート）

よかったこと
<ul style="list-style-type: none"> ・ Learning new things every week (each week, we had a different assignment which kept the course interesting) & feeling like my Japanese is not as bad as I thought after receiving good scores (the validation felt good, even though this course might be a little too easy for me, I had fun because I felt like I could relax in this class, which is what I really needed on a Friday evening) ・ It was a challenging course that aloud students to use Japanese in many practical ways. ・ Working in groups in a field work was great and encouraging. ・ I liked how the class was structured. I felt very prepared when it was time to do the interviews. We had a lot of explanations so it was not hard to follow along in class or for the homework. ・ I liked that we had so much different tasks throughout the semester, that made it more interesting and made me learn different things.
大変だったこと
<ul style="list-style-type: none"> ・ The course was great but it was difficult if you are not confidant in your language ability. ・ I think everything was up to my satisfaction even though my Japanese is still not good and I had to work extra hard to catch up with the class but I think it was worth the struggle at the end.

様々なタスクがあり色々なことが学べた、日本語を実践的に使うことができるチャレンジングなコースだった、グループワークはとても楽しく励みになったなど、肯定的なコメントが多く、学習者たちは授業に満足していた様子が窺えた。インタビューを行い発表し、レポートにまとめるという3つの大きな課題を遂行するために、段階を踏み少しずつ課題

に取り組むことにやりがいを感じ、日本語力に自信がついたと思えた学習者もいたようだ。また、2つの日本語レベルの履修者が混在するクラスであったので、課題を容易に感じた学習者がいた一方で、チャレンジングだったと感じた学習者もいたことは予想できる結果であった。しかし、グループワークであってもある程度個人の日本語力に合わせて難易度の調整が可能な課題であり(自分の日本語レベルの範囲で質問を用意したり、インタビューをまとめたりできるなど)、大変であっても努力すればやり遂げることができる課題であったので、頑張った甲斐があったというコメントが得られたのであろう。

4.2. 店側からのコメント

インタビュー終了後、今回インタビューを行った2店舗で覚王山PJについて感想を聞いた(表5)。

インタビュー中、回答に困るような場面もあったようだが、店側も色々な国の留学生と接することを楽しみにしており、好意的に受け止めていることが分かった。店側の協力がなければ成立しないプロジェクトであるため、この企画を続けていってほしいというコメントは励みになる。

表5 店側の感想

インタビューに協力してよかった点・おもしろかった点
<ul style="list-style-type: none"> ・留学生の国が様々だったので、こちらからも逆質問をした。日本が楽しくて帰りたくないという人ばかりだった。日本に来ること自体勇気がいったことだろうし、祖国に帰っても日本のことを思い出すだろうと思った。いろいろな国の若い人と接することができるのはうれしい。 ・日本語をちゃんと勉強して真面目に質問して、和菓子に興味を持ってもらえるだけでうれしい。和菓子は日本の文化。世界の人に和菓子の良さを少しでもわかってほしい。 ・発表のための資料をもらうが、短時間のインタビューなのに上手に書いてあるのでびっくりする。和菓子を食べるのも勉強の一つ¹⁾。雑談しながら笑顔が見られるのもうれしい。
大変だった点・困った点
<ul style="list-style-type: none"> ・インタビューを受けるこちら側もぶっつけ本番などところがあるので、どんな質問がくるか大体的な予想はつくが、たまに予想外の質問もあるのでその時は頭をフル回転で対応した。 ・特に大変だったり困ったことはない。インタビュー中にお客様が見えると中断するので申し訳ない。それも勉強の中の1つかもしれない。
その他コメント
<ul style="list-style-type: none"> ・こういう企画はすばらしいことで続けていってほしいと思っている。学校外での一歩踏みこんだ勉強は学生さんにとっても貴重な経験で将来プラスになることもあるかも。

5. まとめ

本コースは、2004年に中級の学習者対象に考案された活動であったが、度重なる日本語レベルの改定により、一度は初級後半の学習者のみが対象となっていたが現在は初級後半と中級前半の2レベルの学習者の履修が可能となっている。コロナによるオンライン化

や履修者レベル変更の度に、現場の教員は学習者に合った活動にしようと教材や活動の見直しに翻弄された。一方、中級で実施された際も、初級後半で実施された際も学習者の満足度は高い。津田（2010）は「学外授業まで教室内で何度練習を重ねても、多くの学習者は当日の朝、まだ不安げな様子である。しかし、インタビューを終えると一転して明るい表情を見せる。これは重い課題を終えたという安堵感だけではなく、自分の日本語が未知の場で、普通の日本人に通用したという自信から生まれるものなのではないだろうか。これまで度々『覚王山プロジェクト』の実践に携わり、強く感じているのは、学習者にとってこの経験が、日本語力の上達を実感し、さらに上のレベルを目指す学習意欲を奮い立たせるための絶好の機会となっていることである。」(p86)と述べているが、これは約10年後の今でも、対象者が中級から初級後半に広がっても、担当教員が感じることである。昨今、発表を好まぬ内向的な学習者が増えつつあるが、覚王山PJで得られる経験は留学生にとってかけがえのないものなので、活動を引き継ぐ教員により今後も別科とともに発展していくことを期待する。

(注)

- 1) 「覚王山プロジェクト」は2004年秋学期にIJ400を担当した榎本安吾先生により発案された。その後様々なコース主任と非常勤講師により継続されているが、2012年にセミナーコースとして独立するまでは主に津田彰子先生が中心となり担当していた。
- 2) 当時の中級前半のクラスは、プレースされた学習者の多くが本国で既に中級クラスを履修済みであり、中級の復習をしつつ上級の難しいタスクも授業に取り入れられており、現在よりもややレベルが高いものであった。(2023年現在、IJ400と同じ位置づけのIJⅢの履修者の多くは初級文法を習ってはいるが定着しているとは言い難く、初級の復習をしつつ中級の学習を進める必要がある。)
- 3) 陶器店、紅茶店、晷店、和菓子店、仏具店、炭の専門店、玩具店、ブックカフェ、果物店、アジア雑貨店、履物店、駄菓子店、蜂蜜とチーズ店、骨董と和風小物店、石材店、古着物店、砂時計の専門店など26店舗ほどの候補があった。
- 4) 当時はテクノロジーに弱い学習者も多く、日本語でタイプした経験がない者やパワーポイントの操作もままならない学習者もいた。
- 5) 一番下のクラスNIJ300は『げんきⅠ』と『げんきⅡ』の15課までをカバーするクラスであった。なお2013年秋学期からは14課までカバーすることに変更された。
- 6) 2022年春からはMJP (Modan Japan Program) のFundamental Japanese IV (FJⅣ) の学習者も履修可能となった。これは『げんきⅡ』のL19-L23をカバーするクラスである。
- 7) 紅茶店、晷店、和菓子店、炭の専門店。
- 8) 2021年秋と2022年春も引き続きオンライン留学で学習者は渡日できない状態が続いたが、この授業の履修者はいなかった。
- 9) アメリカ2名、イギリス1名、フランス1名
- 10) アメリカ3名、ガーナ2名、ベルギー1名
- 11) 和菓子店に行った学習者はインタビュー後お店のご厚意で好きな和菓子と抹茶の飲食体験をさせてもらえる。

12) 学習者から許可を得て掲載

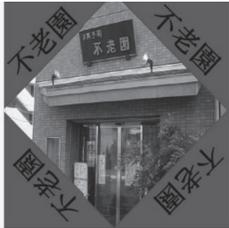
参考文献

- 小森和子・三國純子・近藤安月子 (2004) 「文章理解を促進する語彙知識の量的側面—既知語率の閾値探索の試み—」『日本語教育』120、pp. 83-92.
- 津田彰子 (2010) 「中級日本語学習者を対象としたプロジェクト・ワーク『覚王山プロジェクト』について—」『国際教育センター紀要』 pp. 81-87
- Furco, Andrew. (1996) Service-learning: A Balanced Approach to Experiential Education. *Expanding Boundaries: Service and Learning*. Washington DC: Corporation for National Service, 2-6.

教材 (主教材)

- 坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子 (2011) 『初級日本語げんきⅡ第2版』The Japan Times
- 坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子 (2020) 『初級日本語げんきⅡ第3版』The Japan Times Publishing
- 三浦昭・マグロイン花岡直美 (2008) 『中級の日本語 改訂版』The Japan Times
- 安井朱美・井手友里子・土居美有紀・浜田英紀 (2019) 『4技能でひろがる中級日本語カルテット I』The Japan Times

資料1 学習者が作成した店を紹介するチラシ (オランダ語と日本語)¹²⁾

	 <p>Namagashi Saogashi</p>		 <p>生菓子 棹菓子</p>
<p>Traditioneel Japanse delicatessen winkel</p> <p>Adres: 〒464-0821 1-31 Suemoridori, wijk Chikusa, stad Nagoya, prefectuur Aichi</p> <p>(Naastr uitgang 4 van station Kakuozan (Higashiyama-lijn))</p> <p>Openingstijden: 8:00-19:30</p>	<p>「gemiddelde prijs/stuk」</p> <p>【Waarom Furō-en ?】</p> <ul style="list-style-type: none"> Geniet binnen van de warme sfeer & van de wagashi, geserveerd met een lekker kopje thee ! De eigenaars geven met veel plezier meer uitleg over de verschillende <p>Mijn aanbeveling</p> 	<p>伝統的な日本の和菓子 のお店</p> <p>手作りの和菓子がいっぱいのお店 - 小豆のあんが入った砂糖ともちのお菓子</p> <p>住所 〒464-0821 愛知県名古屋市中区末盛通1-31 (覚王山駅 (東山線) 4番出口横)</p> <p>営業時間: 8:00~19:30 定休日: 日曜日</p> <p>ウェブサイト http://www.furoen.com</p>	<p>「平均価格/個」 * 300円 *</p> <p>【なぜ不老園なのか】</p> <ul style="list-style-type: none"> 店内では、温かい雰囲気の中で、お茶と一緒に和菓子を楽しめる! 店主さんたちが商品について詳しく説明してくれる! 今も手作りの新鮮な商品を作っている本格的なお店! <p>私のおすすめ!</p>  <p>いちご大福</p>

Transition of Kakuozan Interview Project

Miyuki DOI

Abstract

This study analyzed the Kakuozan Interview Project, in which international students interview the owners of stores in Kakuozan. The Kakuozan Interview Project has been offered almost every semester at Nanzan University since the fall semester of 2004. Due to several revisions of the Japanese class level settings throughout the program, the project has been implemented mainly for students with Japanese language levels different from those originally targeted when the project was first conceived, but the project has been revised to match the students' levels through the ingenuity of the teachers who have taken charge of the project. The period from the fall 2018 semester to the spring 2023 semester, when the author was in charge of this class, was a period in which the course materials and course activities were particularly forced to be revised due to various factors, including two changes in the Japanese level setting for students eligible to take this class and an online class due to the spread of the new coronavirus infection. One thing that has not changed since this project was first implemented in 2004 is that the students themselves feel that their Japanese language skills have improved through this project, making this project an activity that gives students a sense of accomplishment.

KeyWords : short-term exchange students, upper elementary level of Japanese, interview with shop owners, project work, online